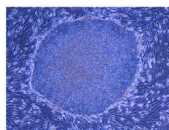


「お墓がない」

一ヶ月のご無沙汰でした。明けたと思ったらあっという間に 2 月ですね。英語では「Time flies」というそうですがまさに飛ぶが如し。改めて時の移ろいの早さを実感しています。大きな



ニュースにもなりましたが、「iPS 細胞」を非常に簡単な方法で作ることに成功した、というニュースが流れました。研究の主幹は 30 歳の女性！快挙ですね。日本がこれからの超高齢社会を乗り切っていくにはこうした若い方々のイノベーションにかかっていると断言していいでしょう。

さて今回の話題は「お墓がない」。超高齢化社会は「少産多死社会」と言い換えることができます。まずはこのグラフをご覧ください。日本は 2005 年に出生する赤ちゃんの数を死亡者が上回っています。この時点から日本は人口減少社会に突入したのです。

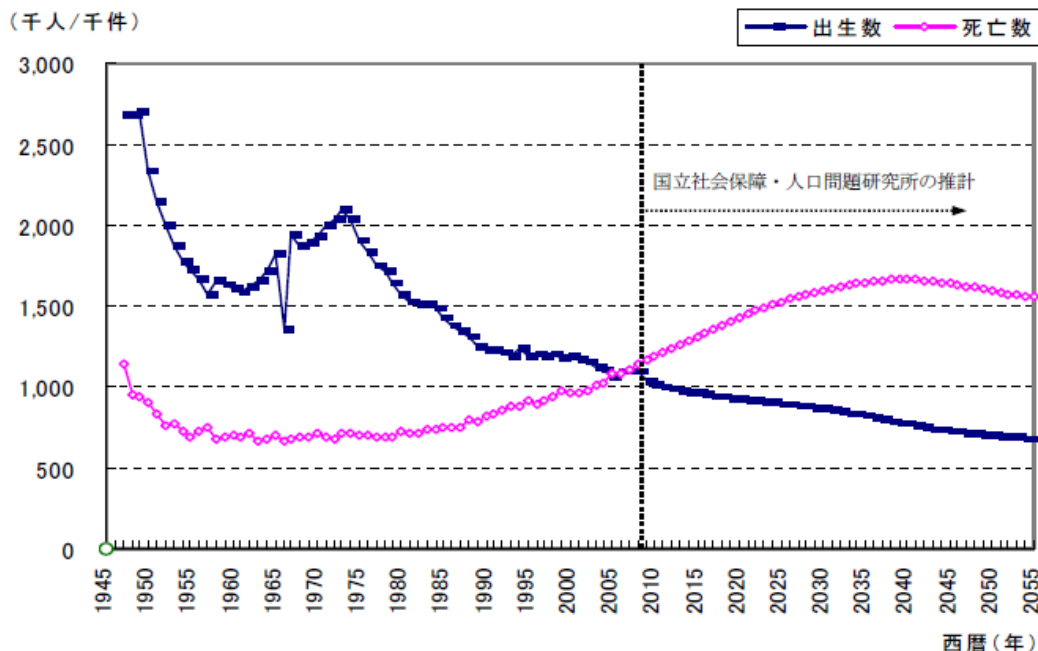


図1 出生・死亡数の年次推移・推計

2025年には死亡数は150万人を超え、ピークの2040年には170万人に達します。これは団塊世代の多くがこの時期に死亡するからです。出生数は下落の一途、2040年には年間100万人の人口が減ります。この年に私は81歳、微妙ですね^^。iPS細胞で肝臓が再生されていたら生きているチャンスはありそうです。前述の理研の研究主幹は56歳です。ぜひノーベル賞を受賞し

ていて欲しい。

これだけたくさんの方が一年に亡くなります。葬場はどこも満杯かもしれません。これは成長産業だな、と感じたのですが、実際には異なりました。現在一件当たりの葬儀の単価は下落を続けています。ここ **5年間の平均を見ても単価は170万円から133万円に激減**していま



す。家族葬が増えているからです。家族葬はごく身近な親族だけで行うものです。葬儀を行わず火葬だけのプランが非常に伸びているそうです。一番安いものでは20万円前後でできてしまいます。多くは自治体からの援助制度があり、実質は15万円です。高齢で亡くなる人が増え、親戚も友人も少ないという現実を反映されています。なんだかちょっと寂しいですね。

さて葬儀が終わると、多くの場合49日の法要の際に墓地に納骨されます。ここで大問題が起きています。自分が入るべき**お墓を持たない人が急増**しているのです。東京都では現在年間10万人の方が亡くなっています。これに対して都営霊園の販売数は年間わずか1500基（平成4年から20年までの平均）だけ。全く足りません。毎年、高倍率の抽選です。しかも、都としてはこれ以上の開発は難しいという見解を示しています。もっとも自分のお墓があるよ、という人

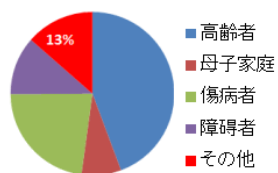


たちがいます。推計ですが70%前後の人たちは自分の入るべきお墓を保持しています。単純計算で行くと約3万人の方のお墓がない状態であるということです。ちなみに都内ではお寺や民間のお墓を買うととんでもない値段になります。全国平均で200万円ですが、東京都はお

墓まで高い、約300万円です（永代供養料を含む）。高い！**！** と思いました。幸い私は両親が自分のお墓を生前に買っておいてくれましたので助かりましたが、もしなかったとすると大騒ぎになったでしょう。

さらに追い打ちをかけているのは高齢者の家庭の経済状況が思わしくないのです。日本の民間の資産の圧倒的な額は高齢者が持っています。しかし、一口で高齢者といってもものすごいお金持ちからギリギリの生活をしている人たちまで**二極化**が進んでいます。図の生活保護の需給状況を

平成21年度 生活保護受給者



をご覧ください。受給世帯数全体が伸びているのと同時に高齢者世帯が42%を占めるに至っています。65歳を超えると多くの方の収入は年金のみになります。ただでさえギリギリの生活をしている中で、葬儀は質素にするにしても、お墓を買う余裕はないという

人が増えています。納骨できないために自宅に遺骨を持っている家庭が増えているのです。

さて、ちょっと視点を変えてみます。お墓ってなんでしょう？日本の現在のほとんどのお墓は「何々家代々の墓」です。これがずーっと我が家の家系を守ってきた、というのは嘘、とは言いませんが、案外新しいのです。江戸時代までは庶民にはお墓なんてありませんでした。何しろ苗字がないのですから。町や村のある場所に土葬されるだけでした。明治に入り国民全員に苗字がつきましたが、都市部でのお墓が足りないという状況に至り、火葬を国是として青山墓地を初めて都営で作りました。すなわち庶民にとってお墓というのはたかだか 100 年の歴史しかありません。**代々のお墓にすることによってお墓を効率的に集積した**のです。ひとつのお墓に代々の家族は入れられるようにしたのです。これは欧米にはあまりありません。個人墓です。お墓のための土地が十分にあることと、キリスト教文化では来世信仰がありますので土葬が原則です（現在はローマンカトリックも火葬を許容）。

「何々家代々の墓」というのはとても良く出来た仕組みでした。先祖を敬い、子供たちが子々孫々にわたってお墓の面倒を見る。それは道徳的にも儒教の教えにも合致するもので、国家の「人道」とも合致していたからです。

しかし、現在この仕組みが崩壊しようとしています。少子化、一人っ子同士が結婚した場合、片方の（多くは妻側）お墓は無縁仏になってしまいます。また離婚シングル、非婚者、子供のいない夫婦は自分が入るべきお墓があっても、そのあとの面倒を見てくれる人がいません。これが特に都市部において大きな問題となってきているのです。

これらの状況に対して、お寺や民間企業がお墓をビジネスとして対応しています。代表的なものの一つが「個人墓」です。これは個人単位でお墓を買うことができ、面倒を見る人がいない人も 33 回忌までお寺が供養をするという契約をします。これは本人が生前に自分の意志で入会することを基本とする仕組みです。四谷にある東長寺は 1996 年からこのシステムを取り入れた納骨堂式個人墓を始めています。利用者は東長寺「縁の会」に入会します。費用は 80 万円、墓碑、戒名、位牌、納骨法要、納骨堂使用、永代供養、管理が含まれており、管理費や年会費は発生しません。お墓の石は高さ 21 c m、縦横 10 c m の御影石です。墓碑の正面に会員の名前を刻み納骨をします。契約は一人単位、夫婦で入る場合は二つの契約が必要です。160 万円。子供がいない夫婦にとっては安心かもしれません。現在までに 12,000 人が入会をしています。

**生きているうちに
自分のお墓を決めて
安心しました。**



同様の仕組みが都市部を中心として広がっています。親族がお参りに来て入口でカードを差し込むと機械式エレベーターが位牌の入ったボックスを搬送し、遺族の前に現れる仕組みもあります。マンションなどにある駐車場と同じ仕組みです。なんだかちょっと軽い気がしますね。それ以外にもロッカー型と呼ばれるものや、インターネットでいつでもお参りができる仕組みも出来上がってきています。

別の試みとしては樹木葬が挙げられます。樹木葬は、墓地埋葬法等による許可を得た墓地に遺骨を埋葬し、遺骨の周辺にある樹木を墓標として故人を弔う方法です。遺骨を埋葬するたびに新しい苗木を1本植えるケースや、墓地の中央にシンボルとなる樹木を植え、その周辺の区画に遺骨を埋葬するケースなど様々な方法があります。遺骨は原則として骨壺から出して直接土に埋めま

す。自然に還るという考え方でしょうか。似た考え方として「散骨」という考え方もあります。海や山に直接お骨を撒く、というやり方ですが、厳密に言うと「墓地、埋葬等に関する法律」に抵触をしてしまいます。お寺や霊園以外の場所には納骨をしてはいけないのです。しかし、現在では「葬送のための祭祀として節度をもって行われる限り遺骨遺棄罪に該当しない」という解釈が法務省から出されています。

もう一つ別の問題があります。これは「代々の墓」には入りたくない、という人が増えていることです。現在首都圏でリタイアをした人々は高度成長期に地方から出てきた人が多い。この人たちが長子である場合、田舎に自分が入るべきお墓がある場合があります。これに対して妻である女性から大ブーイングが上がっています。「縁もゆかりもない土地に、ほとんど知らない人々と眠るのは嫌、しかも田舎であれば子供達も墓参りに来てくれない」という声です。それ以外にも「夫の両親と一緒にいるのは嫌」嫁姑問題でしょうか。「夫と一緒にはいや」さっさと離婚をしたほうがいいのかと思います。「ペットと一緒に入りたい」



夫よりペットというのは非常にリアリティがありますね。父のお墓（高尾山）にもペットの霊園が併設されています。そちらのほうがお花の数が多いのです。

さて、これまでに見た限りでは、どうしても50万円近い費用が発生してしまいます。これを負担できない人たちのお墓をどう考えるか。結構重い課題です。新たな仕組みが求められています。そもそも、お墓というのは墓地でなければいけないのでしょうか。

さていかがでしたか？結構面倒なテーマです。お仕事もお待ち申し上げます。

株式会社アール・リサーチ 代表 柳本信一

Tel 042-300-0533 mobile 090-7428-8999 mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp